

# 郡上高校版自然薯栽培の確立をめざして

自然薯栽培専攻

## 1 課題設定の理由

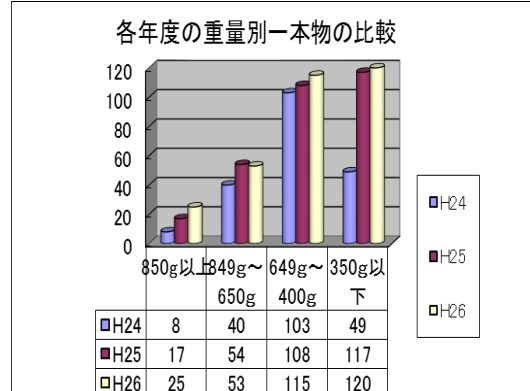
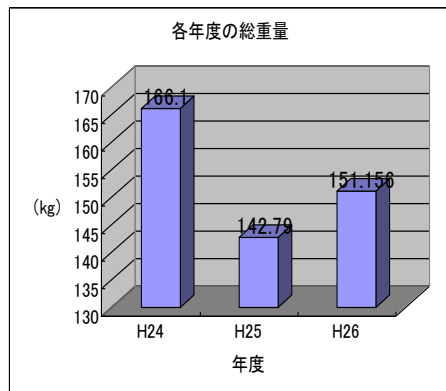
**課題 1** 郡上高校での自然薯栽培が 7 年目を迎え、(縦植え二条植え、以降標準区と呼ぶ)の栽培方法はある程度確立できた。しかし、一方、収穫が一度にできない、施肥、除草などが簡単にできな改良点もあり、本年は、労働力のある私たちが効率よく栽培できる、郡上高校版自然薯栽培(種イモ 10 本を横一列に配置する十条植え・以降十条植えと呼ぶ)を試験区に設け従来の方法のような成績が残せるか検証した。

**課題 2** 肥料三倍区・液肥区(いずれも二条植え)を設け、上記の栽培方法と比較検討した。

**課題 3** 昨年と引き続き継続実験として種イモの自家栽培を行った。

## 2 過去 3 年間の重量別生産量の比較

自然薯は湿度を嫌うため、今年は長雨の影響で土の湿度が高くなり、塊のような自然薯が多く生育した。しかし、850g 以上の 1 本物の本数は昨年を上回り、生産重量は平成 25 年 142.79kg 平成 26 年 151.156kg と昨年度より向上したが、2 年前を下回った。以上のことから、本年度の総重量は、一昨年より生産を下回ったが、昨年度より 8.366kg 増加した。原因として考えられることは、本年度は誘引が昨年度よりうまく行えたことだと考える。



## 3 課題の検証結果

### 課題 1 の検証

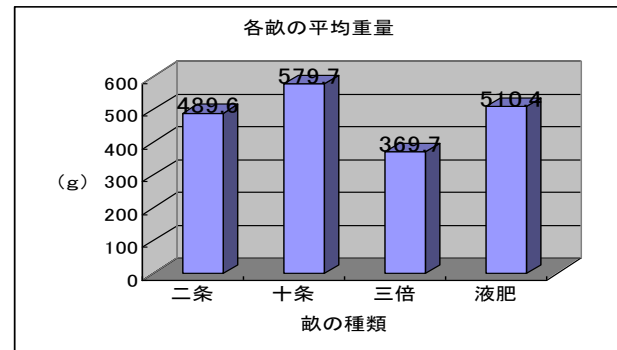
本年度の標準区の本物の割合は 44%、十条区は 71%と高く非常に高い結果となった。この理由は、十条植えでは横に高く土寄せするため湿度の影響が少ないためであったと思われる。畝を高くすることは労力を必要とするが、生産労働力のある郡上高校では十条植えは十分成績の期待ができる栽培方法であると思われる、来年は 100 本以上作るとよいと思われる。



十条植え定植の様子

### 課題 2 の検証

施肥は一本当たり自然薯専用肥料を 100g 施すことを基本とし、三倍区では 300g に設定した。右記のグラフから考えられることは、肥料は現在の 100g が適量でそれ以上でも重量の増大は見込めないと思われる。さらに本年度は 3 倍区の場合が最も傾斜の低い場所で、湿度の影響を受けているなどの悪条件も重なった。一方、8 月より週二回液肥を与えた液肥区(液肥はハイネックス)は 510g と標準区の 489g を超え約 4%の増大が認められた。よって液肥の効果は十分にあると思われる、肥料を増やすより液肥で養分を与える栽培方法が有効であると思われる。



### 課題 3 の検証

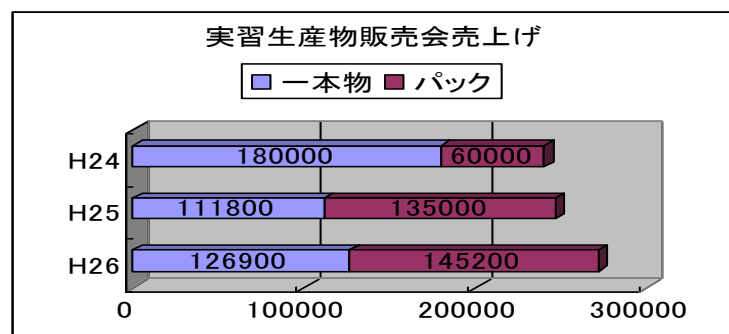
インキュベータによる目出しは、今年も成功した。しかし畑への定植の時に冠水を怠ってしまい多くが枯れてしまった。そのため残った苗を一つずつ筒状に定植し、本年度は 7 本しか種芋を作れなかった。種芋栽培についてはいかに定植の時にストレスなく定植するかが大切であると考えられる。



種芋栽培試験区の様子

## 4 実習生産物販売会の過去 3 年間の売上

今年度の販売会の総売上げは 272,100 円だった。これは過去 3 年間で最高記録であった。以上のことから地域のニーズは確実に定着しているといえる。



## 5 まとめ

今年度全体の収穫数は 313 本だった。そのうち 489g 以上の一本物で販売できる自然薯は、収穫した全体の 28%にとどまった。この原因は大雨、台風といった天候のための過湿度の影響が考えられ、一方、収穫量が伸びたのは誘因がうまくいき自然薯の光合成が効率よくできたのが原因と考える。そのため適切な誘因を基本に行うことが増量につながると考える。来年度は液肥の利用などを含め 1 本物が 50%以上になるよう目指したい。来年度は、郡上高校方式を増やし、オリジナル生産方法を確立してほしい。



最盛期の自然薯棚の様子